秀 賞

あの日の私へ

青森県八戸市立根城中学校

二年 狛 守 響 子

「二年二組自由曲『YELL』努力賞。」

その言葉を聞いた瞬間、頭が真っ白になった。今日の合唱コンクールでの合唱は、今までで一番の出来だったのに……、と私の胸に悲しみがこみあげてきた。クラスのみんなは、どんな表情をしているのだろうか。周りを見回すと、悔しがる者あり、無関心な態度の者もあり、しまいには周囲の友人とニヤニヤと笑いあう者もあった。あまりのクラスの温度差に、私は腹が立ち、ますます悲しくなった。

帰り道、車に揺られながら考えていたのは去年の合唱コンクールのことだった。私の所属していた一年四組は、合唱コンクールへの取り組みが順調に進み、結果は金賞だったのだ。私は今までクラス一丸となって一つのことに取り組むことの楽しさを感じたことがなく、面倒臭いと思っていた。しかし、初めての合唱コンクールを通して、私の考えは変わった。全員で一つのものを創りあげることの難しさやそれを乗り越え、賞を手にしたときの喜びは今まで経験したことがない程、感動的だった。それに比べて今年はどうだ。クラス全員が一丸となれただろうか、歌うことの楽しさを分かち合えただろうか……。考えれば考える程、むなししい気持ちになっていった。

やりきれない悔しさに視界が涙でかすんだ。

「着いたよ。」

母の声で我に返ると、私はとぼとぼと家に入った。

「そっかー。努力賞だったか。」

「うん。」

「残念だったな。」

父、母、妹と私の四人で食卓を囲んだ。そこで私は合唱コンクールに対する自分の思いを包み隠さず、家族に話した。一番に口を開いたのは父だった。

「お父さんは合唱が苦手だったから、合唱コンクールは、嫌いだっただなあ。」

「へえ。でも、途中で投げ出したりはしなかったでしょう?」

「いや。思春期真っ只中だったから、合唱っていうのが気恥ずかしくて、本番は歌えなかったよ。」

真面目な父の意外な中学生時代に私はとても驚いた。母もうんうんとうなずいた。

「私が高校生だったときの話だけど、クラスがまとまらなくて。本番、曲を最後まで歌いきれなかったのよ。」

二人から語られる合唱コンクールのエピソードは驚きの連続だった。

「大人でも意見が一致しないときがたくさんある。中学生ならもっとだろうな。だけど、その中でみんな足並みをそろえてやるのが大切なんだろうな。みんながみんな、違う考えを持っているのは当たり前なんだから。」

父の言葉に、私は目が覚めたような気がした。

自分の部屋に戻ると、小学校時代のアルバムや文集を探しだし、見てみた。どの写真も覇気のない顔をした私が写っていた。最初のうちは見ているだけで嫌気が差した。しかし、昔の自分を思い出していくうちにあることに気付いた。

「私も、思春期の葛藤の中に居たんだ……。」ふと目に入ったのは、ほこりを被ったランドセルだった。

その中で息をひそめていたのは、毎日書いていた日記帳だった。中には、先生への不満だとか、好きな人の話だとか、そんな他愛のないことばかりが書かれていた。ページが後半になってくると、こんな言葉が書きつらねられていた。「自分に自信がなくて、積極的に取り組めない。」「みんなと一緒にやりましょう、とか柄じゃない。」私は吹き出してしまった。自分が敵視していたクラスメイトの姿は、まるで昔の自分じゃないか、と。

合唱コンクールという行事は、今まで目を背けてきた、過去の自分と向き合うチャンスを与えてくれたのだ。人間が百人いれば、百通りの考えが生まれるだろう。『みんながみんな違う考えをもつのは当たり前』このことに私は気付くことができた。自分の考えを他の人へ押し付けてしまったという失敗が大人へとステップアップする「力」をくれたのだ。

私はもう一度日記帳を手にとると、最後のページを開いた。そこには「三月十八日、卒業式」と記してあった。「今日で私の小学校生活が終わった。中学校に入ったら、今の駄目な自分から、変わる事ができるのだろうか。」とつぶられていた。私はペンをとり、「大丈夫。きっと変わるよ、未来へと進んでいける。」と書き足した。

今回の経験で学んだのは、人にはそれぞれ違った考えがあるということです。だからこそ互いの考えを尊重し認めあうことが大切なのだと感じました。そしてもう一つは、挫折や失敗と向きあい、乗り越える努力をすることが過去の自分から成長する力になることに気付きました。この二つの経験を力にしてこれからも進んでいきたいです。

作文を書くに当たって